

応援における行動と感情に関する一研究

川田芽依

(山口大学大学院教育学研究科)

目的

私たちは日常的に応援という行為を行っている。笠置 (2019) は周囲の応援の仕方によって、応援を受ける人のパフォーマンスは影響があると述べている。また藤本 (2006) はプロスポーツで応援活動を行う有志のファンは、応援を通じて愛着やコミットメント、チームロイヤリティ等の心理的な結びつきを生成していることを指摘し、応援は意味的価値を持つとしている。しかし、様々な応援における応援側の意味的価値やそれらの違いについて、十分に検討されているとは言い難い。加えて、応援には様々な行動があるとされている。丹羽 (2018) は応援とは実体的な支援や声援を送るだけの行為も含まれると定義しており、様々な応援行動があると考えられ、応援行動別に区別して検討する必要があると考えられる。よって、本研究ではどのような応援行動があるのか、その行動を行う理由やその時の感情について研究を行い、応援行動により理由や感情に差異があるかについて検討を行う。

調査I方法

手続き：SNS (LINE や Twitter) を用いて、Google フォームにて調査を行った。

調査協力者・調査時期：2021年7月、10代から40代の計39名 (男性12名、女性27名)

質問項目：①属性 (性別、年齢)、②「応援する行動」とはどのような行動だと思うか (自由記述)

調査I結果

得られた自由記述から、川喜田 (2018) を参考に KJ 法を援用して分析を行った。応援行動は【言葉での応援行動】【鑑賞での応援行動】【メディアを使った応援行動】【贈り物での応援行動】【購買での応援行動】【体を使った応援行動】【集団による応援行動】【関わりのある応援行動】【心の中で祈る応援行動】という9つのカテゴリーに分類された。

調査II方法

手続き：SNS (LINE や Twitter) を用い、Google フォームにて回答を求めた。

調査協力者・調査時期：2021年12月、計46名 (男性8名、女性37名、平均年齢21.4歳)

質問項目：①属性 (年齢、性別)、②予備調査で得られた9つの応援行動について、その応援行動を行うかどうか、③なぜ②の行動を行うか (自由記述)、④②の行動を行う時に生じる気持ち (自由記述)

調査II結果

得られた自由記述から、川喜田 (2018) を参考に KJ 法を援用して行った。【言葉での応援行動】は相手に対し伝えたい理由や相手を想う気持ちが見られた。【鑑賞での応援行動】は鑑賞にて自分の欲求を満たすための理由や自己の感情が示された。【メディアを使った応援行動】は方法の利点が挙げられ、自己欲求を満たしていることが示された。【贈り物の応援行動】は相手に形あるものを伝えたい理由と相手を想う側面が見られた。【購買の応援行動】は購買から自己の欲求を満たしたい理由とそれに伴う満足感が示された。【体を使った応援行動】は分かりやすさなど方法の利点から用いられており、相手に伝えたい気持ちと自己内での感情がそれぞれ示されていた。

【集団での応援行動】は今回行動する者がいなかった。【関わりのある応援行動】は相手を支えたい理由と相手を想う気持ちが見られた。【心の中で祈る応援行動】は、個人の特徴が大きく表れたが相手を想っている理由や気持ちも一定数みられた。

考察

本研究より、応援行動の違いから行動を行う理由や応援時の感情が異なることが明らかとなった。各応援行動には、それぞれに特徴的な理由があり、利点があると考えられる。また、どの応援行動にも肯定的な感情が見られた。このことから、個人の目的によって、その人に合った応援行動を自ら選択できていると考えられる。ただ、「その方法しかない」という消極的選択をする人も一定数見られた。本研究より、このような人たちにも応援行動が他にあることを示すことで、より自己の意図に沿った応援行動へのアプローチになるのではないかと考える。

謝辞

本研究の遂行にあたり、指導教官として終始多大なご指導を賜った、山口大学教育学部春日由美先生に深謝致します。